

(王家の構図—MENAの王族シリーズ・ヨルダン編)

(2003年6月29日記)

前田高行

ヨルダン・ハシミテ家の構図

由緒正しいハシミテ家

ヨルダン王家のハシミテ家はイスラム教の教祖ムハンマド(モハメット)の直系の子孫であり、現在のアブダッラー国王は教祖の43代目となる。ムハンマドにはファティマと呼ばれる一人娘があり、教祖の甥で従兄弟のアリと結婚した。ハシミテ家はその子孫なのである。因みにファティマの夫アリは661年に暗殺されたが、彼をイマーム(指導者)と仰ぐ者達は「アリーを支持する党派(シーア)」を興した。これが「シーア派」の始まりである。良く知られているとおりイランでは殆どがシーア派教徒であり、またイラクでも南部を中心にシーア派が国民の多数を占めている。更にバハレン、サウジアラビア東部など湾岸にも多数のシーアが住んでいる。

それはさておき、ムハンマド直系の子孫はその後第一次大戦までメッカの太守として君臨していた。オスマン・トルコの衰退と第一次大戦時の混乱と言う下克上の世界の中で、メッカの太守フセインは、自らを「ヒジャズ王(メッカを含むアラビア半島紅海沿岸部ヒジャズ地方の王)」及び「King of Arabs(アラブ民族の王)」と称し、長男アリをヒジャズ王に、次男アブダッラーをヨルダン国王、また三男ファイサルをイラク国王にそれぞれ即位させたのである。

このようにハシミテ家は千数百年の歴史を有する極めて由緒正しい王家なのである。ヨルダンの国旗には黒、白、緑の横縞が描かれているが、これはそれぞれイスラム帝国のアッバース朝、ウマイヤ朝、ファティマ朝を表しており、ヨルダン・ハシミテ家がイスラムの正統な王家であることを主張している。

歴史に振り回された近代のハシミテ家

トルコ人のイスラム帝国(オスマン・トルコ)のもとで、アラブ民族は圧政に虐げられていたが、第一次大戦では米英仏の連合軍がドイツと枢軸を結んだオスマン・トルコを攻撃するためにアラブ民族を支援したこともあり、中東全域で一気にアラブ民族独立運動が芽生えた。

この機に乗じ上述のごとく当時のメッカ太守フセインは1916年に「ヒジャズ王」に即位した。彼の4人の子息のうち長男アリはヒジャズ王を継いだ。ヒジャズ地方は半島中央部から勃興したサウジアに1925年に制圧され王国は消滅した。次男アブダッラーはヨルダン地方の王となり、彼は王国を「トランス・ヨルダン王国」と命名し、初代国王に即位した。

三男のファイサルは「イラク王国」の初代国王となったが、彼の孫で第三代国王のファイサル二世はアラブ民族運動の嵐の中で1958年にクーデタで処刑され、「イラク王国」はわずか40年足らずで崩壊したのである。このためハシミテ家で唯一生き残ったアブダッラーは、国名を「トランス・ヨルダン王国」から「ヨルダン・ハシミテ王国」に改名し、由緒あるハシミテの名前を残したのである。

したたかなフセイン前国王

国土の面積が日本の約四分の一しかない小国のヨルダンは、周囲をイスラエル、イラク、シリア、エジプト及びサウジアラビアに囲まれ、アラブ民族運動、中東パレスチナ紛争等々の影響で常に国家存亡の危機に晒されている。そのような中で抜群のバランス感覚と、したたかな政治力で再三の危機をしのいできたのがフセイン前国王である。

アブダッラーの孫であるフセイン第三代国王は1935年に生まれ、1952年から1999年まで50年近く「ヨルダン・ハシミテ王国」を維持してきた。その間、1956年の第二次中東戦争に始まる1967年、1973年の3回の中東戦争を経験し、特に1967年の第三次中東戦争では、ヨルダン川西岸をイスラエルに占領された。これらの戦争やその後も続くパレスチナ紛争を通じてヨルダンは国内に多数のパレスチナ難民を抱えることとなった。

ヨルダン国民の7割はパレスチナ人であるが、彼等は当然のことながら反イスラエル感情が強く、それは反米感情或いはその裏返しとしてのアラブ民族主義やイスラム原理主義へと結びつきやすい。

1990年代のフセイン国王は、強硬なパレスチナ抑圧政策をとるイスラエル、そしてサダム・フセインが独裁体制を敷くイラク、周辺に軍事的圧力を示威するシリア、と常に周辺国から脅威を受けつつ、更には国内のパレスチナ人に対する配慮も必要としたのである。前国王はこの困難極まる状況の中で「ヨルダン・ハシミテ王国」を今日まで持ちこたえてきた。それは単に幸運と言うだけでは済まされない、彼の超人的な外交・内政努力の結果であると言って差し支えないであろう。

土壇場で息子に譲位

1952年に17歳の若さで第三代国王に即位したフセインは、弟のハッサン王子を皇太子に定めた。その後1962年に最初の男児で現在の国王であるアブダッラー二世を得たが、アブダッラーが成人した後も、皇太子はハッサン王子のままであった。

内政及び外交の激務がたたたり、フセイン国王は90年代の後半からしばしば病の床に臥した。そして病状が悪化した1998年7月には遂にハッサン皇太子を国王代理に任命し、米国で療養生活を送るようになった。そして1999年1月、死期を悟った国王は病をおしてベッドに寝たまゝの状態に帰国し、皇太子を弟のハッサンから長男のアブダッラーに交替する勅令を出すと、とんぼ帰りで米国に戻ったのである。

翌月7日にフセイン国王が死亡すると、アブダッラー二世が第四代国王に即位、皇太子は新国王の弟ハムザ王子が指名された。当時、一部では新国王派とハッサン前皇太子派の確執も噂された

が、前皇太子は新体制への忠誠を誓い王位は波乱無く継承されたのである。経済的に貧しく、内憂外患のハシミテ家にとってはお家騒動どころではなかったのであろう。

第四代国王アブダラー二世は1962年生まれである。兄弟は男4人女6人で、次弟のハムザ王子が皇太子である。彼は英国王立軍事学校及び米国の大学等に学び、帰国後は軍歴を重ね、1993年にはパレスチナ人であるラニア王妃と結婚して1男1女をもうけている。1970年生まれのラニア王妃はクウェイトの裕福なパレスチナ人の娘として育ち、ヨルダンの銀行で働いていた時にアブダラーに見初められ結婚した。王妃は非常に活発な女性であり慈善活動や市民活動に積極的に関与し、多数派であるパレスチナ出身ということもあって国民大衆から広く愛され親しまれているようである。

脆弱なヨルダン経済

ヨルダンは面積が10万平方KM弱、人口約5百万人の小国である。GDP総額は83億ドル(2000年)、一人当たりの所得は1,655ドル(同2000年)の貧しい国であり、天然資源はわずかにリン鉱石を産出する程度である。めぼしい外貨獲得手段が無く、イラクとの交易、諸外国からの無償援助等頼みの脆弱な経済構造である。石油はサダム政権時代は全面的にイラクに依存していた。

またオイル・ブームの頃に始まった湾岸産油国への出稼ぎは重要な外貨獲得源であった。しかしながら湾岸戦争において、当時のヨルダン一般国民が、欧米に歯向かうサダム・フセインをアラブの英雄とみなし彼の蛮行を賞賛したことが、クウェイト、サウジアラビア政府の不興を買い、出稼ぎ者の殆どがヨルダンに送還させられ、現在出稼ぎ送金は大幅に減っている。

なお、パレスチナ人の本国送還には別の隠された理由があった。それはサダム・フセインがクウェイト侵攻を正当化する一つの理由として湾岸の王制打倒を掲げたことと、それに対して出稼ぎ先で冷遇に甘んじていたパレスチナ人がイラク侵攻軍を歓呼の声で迎えた事実が、湾岸各国の王家の心胆を寒からしめたためであった。湾岸各国は今も昔も中東紛争の犠牲者としてのパレスチナ人を支援していることに変わりはないが、自らの体制を揺さぶる行為は無視できないのである。この一点を見てもアラブが一枚岩になれない複雑な状況にあることが理解できるであろう。

今後のヨルダンとハシミテ家

これまでフセイン前国王と言う卓越した指導者のもとで、小国にもかかわらず存在感を示してきたヨルダンであったが、イラク・サダム政権の崩壊及びイスラエルとパレスチナ政府の歴史的和解が進展しつつある中で、ヨルダンとハシミテ家の今後はどうなるのであろうか。

ヨルダンに対する米国を含む西欧先進国の援助或いは米国から「悪の枢軸」と名指されたイラクからの石油援助等、対極から同時に援助を引き出してきたヨルダンではあるが、これらはいずれも「危機があればこそ」の援助である。米国の思惑とおり選挙による民主的なイラク政府が生まれ、またイスラエル・パレスチナ関係が正常化するにはまだ時間が必要であろうが、そのような流れが定着した時からヨルダンの影が薄くなることは間違いない。

西欧的民主主義を金科玉条とし、湾岸各国はもとよりイランをも標的にする米国の外交方針はますます厳しさを増している。米国は中東各国に対し王制から民主主義への転換を必ずしも望んでいるわけではなさそうである。王制から民主主義への中東的革命が、リビア、イラク、イランに見られるように米国の望む地域の安定に結びつかなかったのは歴史的事実である。米国にとっての中東の安定とは、とりもなおさずイスラエルに対する脅威の排除であり、また米国主導による石油及び天然ガスの安定供給体制の確保にあると言えよう。

その意味では立憲君主制は王制を維持しつつ西欧流民主主義を定着させる最適の方法である。立憲君主制のヨルダンは今後も米国の支持を失うことは無いであろう。しかしながら米国にとって今後ヨルダンの重要性は低くなり、同国は中東の一小国として徐々にフェイド・アウトしていくのであろう。地球上のあらゆる地域紛争に関与せざるを得ない現在の米国は、一旦落ち着いたと判断した地域については、後は当事者に任せたとばかり、その後情勢が混迷しても自国の国益によほど影響が無い限り、紛争解決に興味を失い、手を引いて傍観者になるのが今の米国である。アフガニスタンはその好例と言えよう。ヨルダンとその王家であるハシミテ家がスポットライトを浴び各国から援助を得られるのも中東紛争あればこそ、と言えは言いすぎであろうか。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp